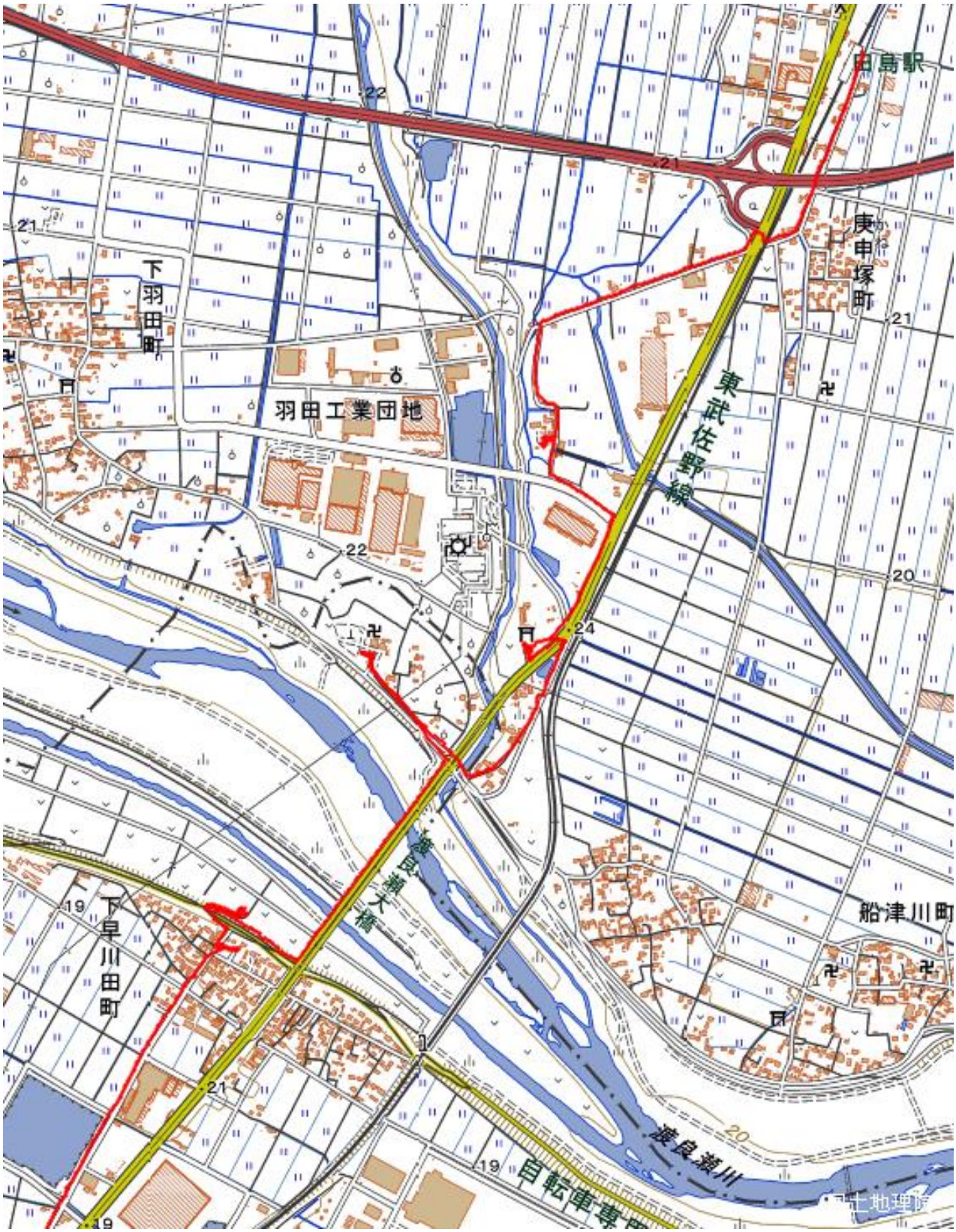
八王子千人同心日光往還ウオーク
第２３回　館林駅から田島駅（計画）
集合　東武伊勢崎線　館林駅　午前９時３０分
歩行距離　約１０．３ｋｍ。

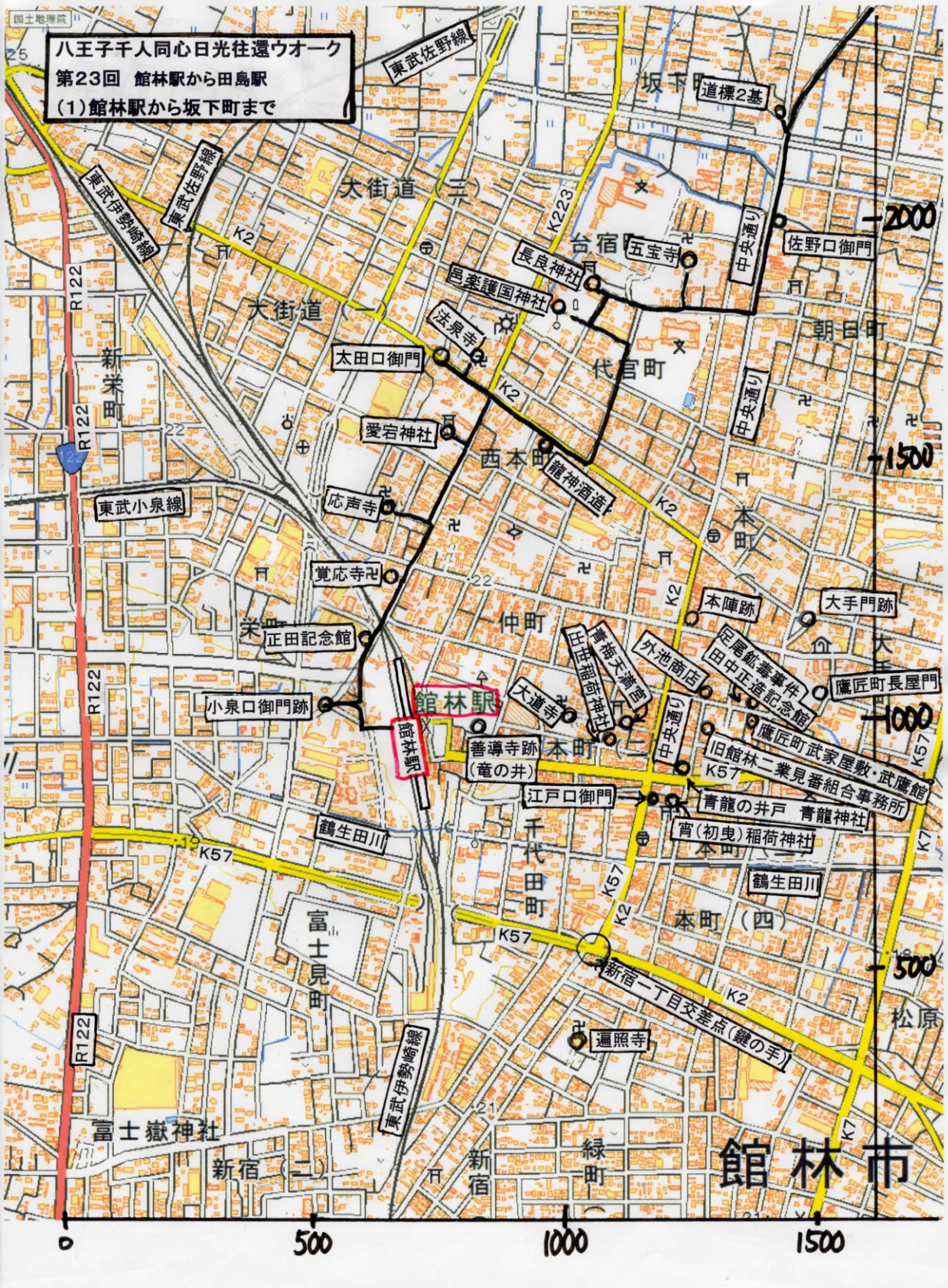
第２３回　館林駅から田島駅
実施日　２０２３（令和５）年４月１９日（水）天候　晴れ　気温高いが風さわやか
参加者　折本　文雄、前北　勝司、中田　信義、中島　征雄　計４名
コース　館林駅西口（９：２８）～小泉口御門跡（９：３０）～正田記念館（９：３５）～踏切（９：３９）～覚応寺〈太子堂〉（９：３９～４３）～応声寺〈館林城の鐘〉（９：４５～５１）～愛宕神社（９：５４～１０：０１）～太田口御門跡（１０：０６）～法泉寺（１０：０９～１２）～龍神酒造（株）～邑楽護国神社（１０：２２～２６）～長良神社〈休憩〉（１０：１８～３７）～五宝寺〈不動まんだら板碑〉（１０：４１～４７）～佐野口御門跡（１０：５２）～惣堀土塁跡（１０：５２～５５）～道標（１１：０２）～東武佐野線踏切（１１：１６）～下早川田堤防下公園〈昼食〉（１１：３３～５４）～馬頭観音石仏群（１１：５７）～渡良瀬大橋（１２：０５～１３）～雲龍寺〈田中正造の墓〉（１２：１８～２２）～田中正造翁終焉の家（１２：２８）～夫婦道祖神・田中正造翁終焉の地碑（１２：３５）～椿田稲荷神社（１２：３７～４３）～椿田城跡〈椿田十一面観音福地堂〉（１２：５２～５５）～田島駅（１３：１４）
田島駅発１３：３９＝館林行き

写真は２０２０（令和２）年１１月１０日下見時と今回のものを使用。
図やイラストは「館林城の再建をめざす会ギャラリー」より。

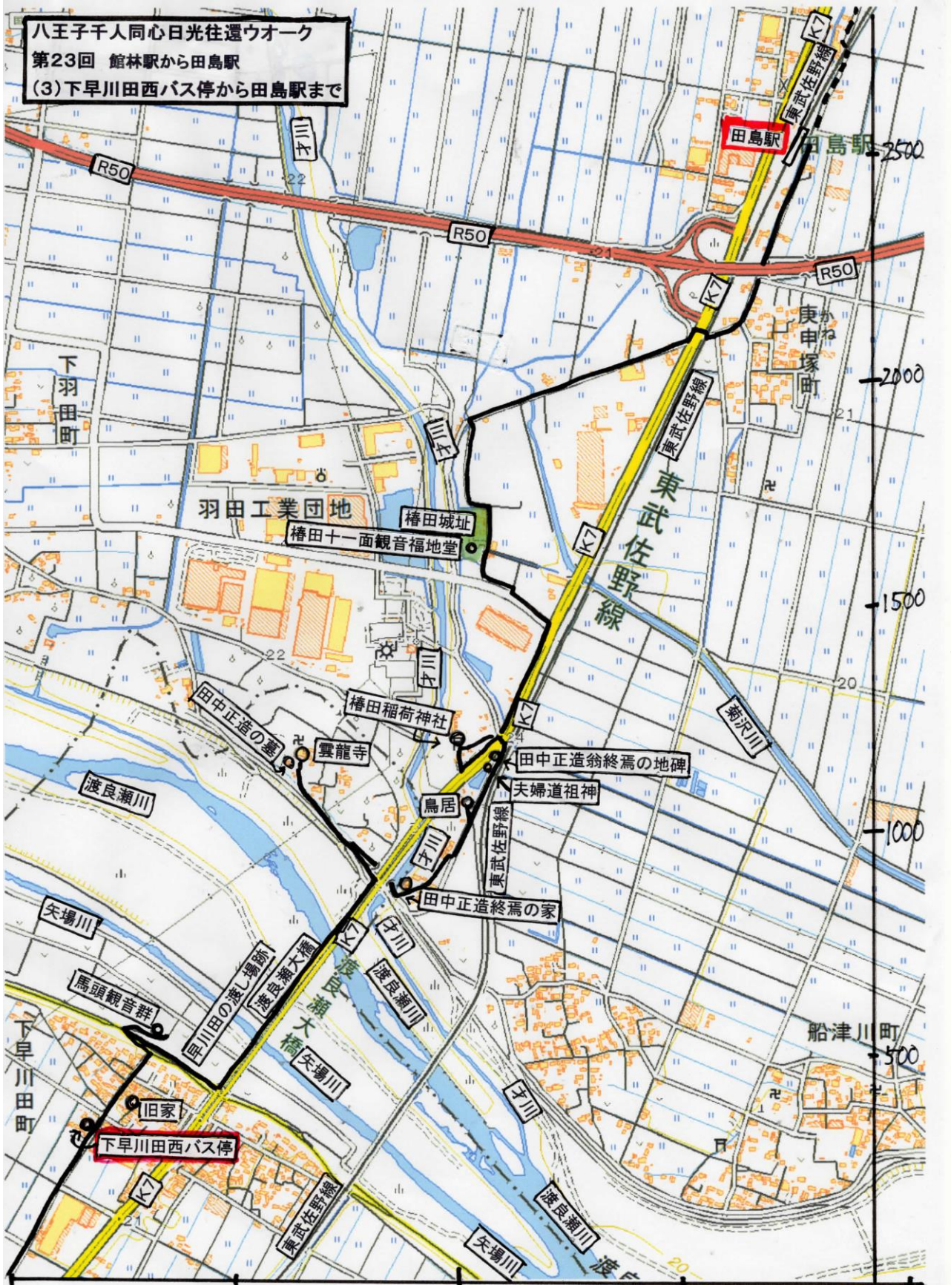
ＧＰＳ
歩行距離：10．6km。　**累計歩行距離　216．3km。**
全体所要時間：**3時間47分**。移動時間：**2時間56分**。停止時間：**51分**。
移動平均速度：3．60km／h。全体平均速度：2．81km／h。

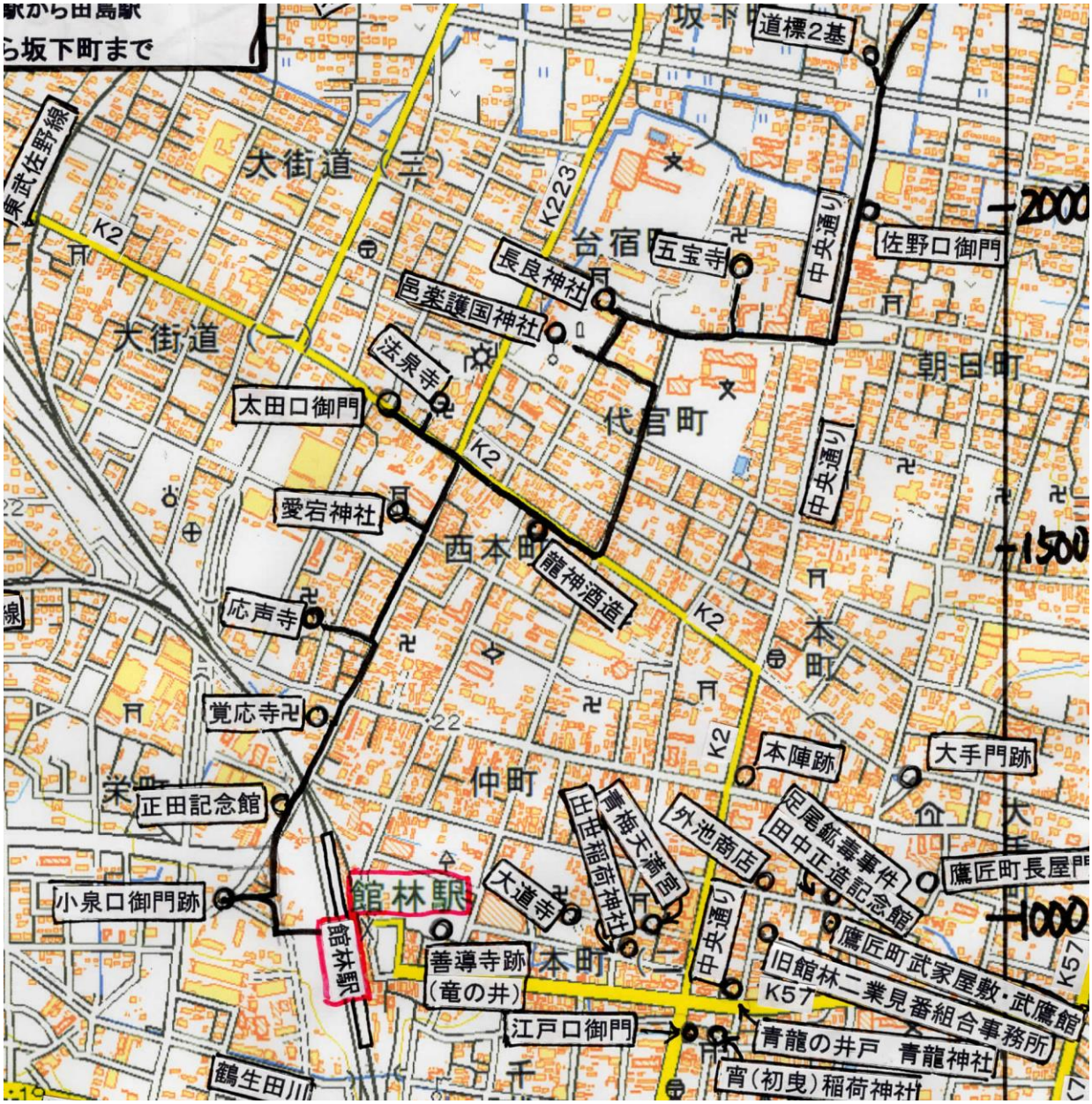
足次町
岡野町
カルピス工
渡瀬駅
広内町
坂下町
東広内町
太街道（三）
瀬戸谷町
若宮
朝日町
代官町
西本町
本町
仲町
大手町
城町
尾曳町
館林駅
本町（一）
文化会館


白島駅
庚申塚町
下羽田町
羽田工業団地
東武佐野線
渡良瀬大橋
下早川田町
船津川町
渡良瀬川
自転車専用
土地理院


八王子千人同心日光往還ウオーク
第23回　館林駅から田島駅
(1)館林駅から坂下町まで
国土地理院
東武佐野線
坂下町
道標2基
大街道（三）
東武伊勢崎線
K2
K223
台宿
五宝寺
佐野口御門
中央通り
長良神社
邑楽護国神社
大街道（一）
法泉寺
朝日町
太田口御門
代官町
新栄町
R122
愛宕神社
西本町
龍神酒道
応声寺
東武小泉線
本町
覚応寺
本陣跡
大手門跡
仲町
正田記念館
外池商店
足尾鉱毒事件田中正造記念館
鷹匠町長屋門
小泉口御門跡
館林駅
大道寺
善導寺跡（竜の井）
本町（一）
鷹匠町武家屋敷・武鷹館
旧館林二業見番組合事務所
江戸口御門
青龍の井戸　青龍神社
宵（初曳）稲荷神社
鶴生田川
K57
千代田町
本町（二）
富士見町
本町（四）
新宿一丁目交差点（鍵の手）
K7
松原
遍照寺
富士嶽神社
新宿（二）
新宿
緑町
館林市
0
500
1000
1500
-2000
-1500
-1000
-500

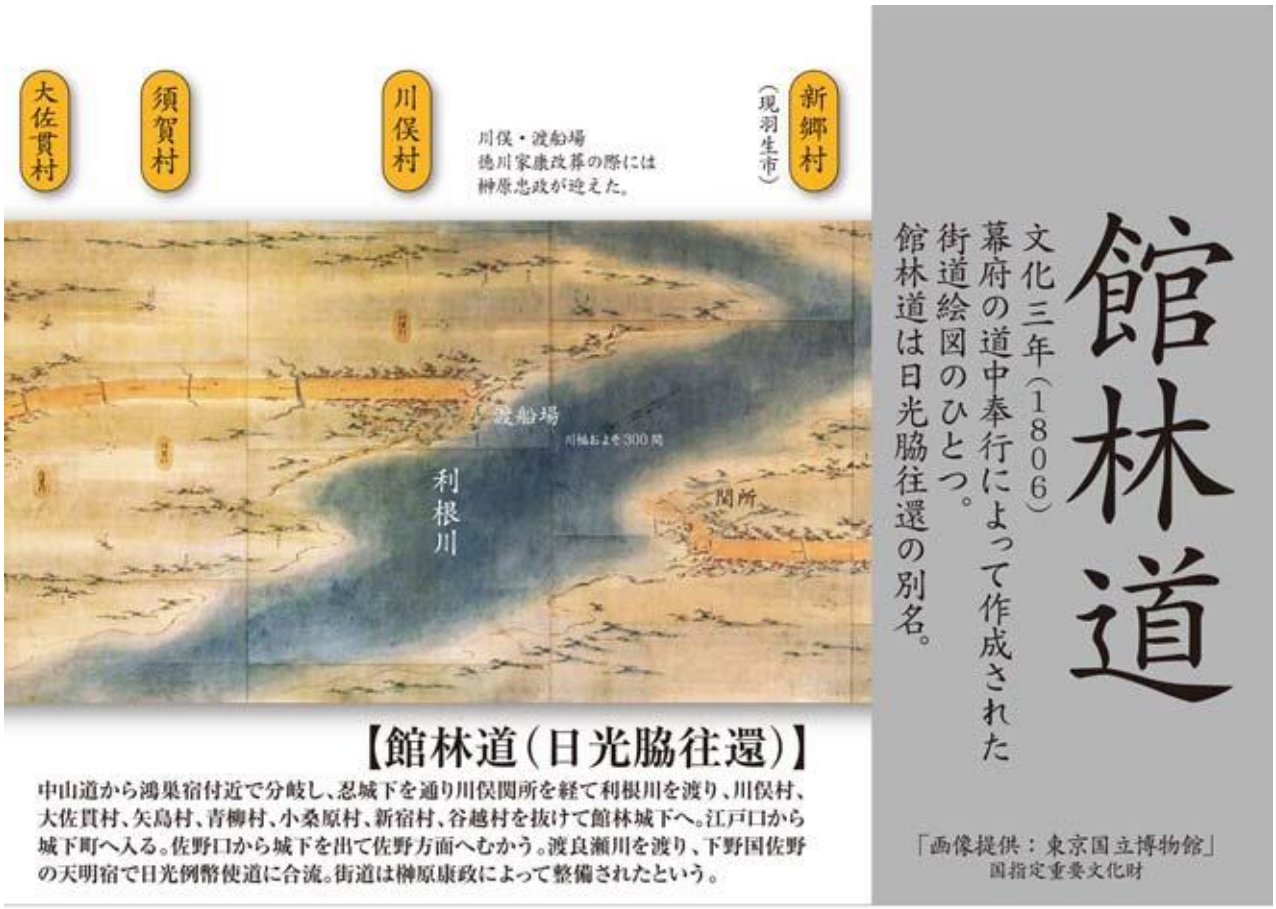
八王子千人同心日光往還ウオーク
第23回　館林駅から田島駅
(2)坂下町から下早川田西バス停まで
国土地理院
矢場川
渡良瀬川
渡良瀬大橋
馬頭観音群
早川田の渡し場跡
下早川田
下早川田西バス停
旧家
広域農道
足次町
左側を歩く
東武佐野線
カルピス工場
渡瀬駅
大新田町
館林市
広内町
歩道なし
道標2基
佐野口御門
東広内町
瀬戸谷町
K7
2000
1500
1000
500
0


八王子千人同心日光往還ウオーク
第23回　館林駅から田島駅
(3)下早川田西バス停から田島駅まで
田島駅
R50
K7
東武佐野線
下羽田町
羽田工業団地
椿田城址
椿田十一面観音福地堂
椿田稲荷神社
田中正造の墓
雲龍寺
田中正造翁終焉の地碑
夫婦道祖神
鳥居
田中正造終焉の家
渡良瀬川
矢場川
早川田の渡し場跡
渡良瀬大橋
馬頭観音群
下早川田町
旧家
下早川田西バス停
菊沢川
船津川町
庚申塚町
2500
2000
1500
1000
500


ら坂下町まで
道標2基
大街道（三）
大街道（一）
K223
K2
台宿町
五宝寺
長良神社
邑楽護国神社
法泉寺
太田口御門
代官町
佐野口御門
朝日町
中央通り
愛宕神社
西本町
龍神酒造
応声寺
本町
覚応寺
本陣跡
大手門跡
仲町
正田記念館
田中稲荷神社
書梅天満宮
外池商店
足尾鉱毒事件
田中正造記念館
鷹匠町長屋門
小泉口御門跡
館林駅
大道寺
善導寺跡
（竜の井）
本町
鷹匠町武家屋敷・武鷹館
旧館林二業見番組合事務所
K57
江戸口御門
青龍の井戸　青龍神社
宵（初曳）稲荷神社
鶴生田川
千
-2000
-1500
-1000

今日は館林城下内の西側の小泉口御門、太田口御門と諸寺社を回り、佐野口御門跡で館林城を出、日光往還を北上する行程。

『第２１回の新郷の川俣関所から今回の田島までの文化三年に作成された絵図』



当郷村

館林城

城沼に面した南郭に二重櫓が見える。弁天様が城沼に浮かぶ島のようであった。東には瑞鶴山と記された場所があり、現在のつつじが岡公園。

谷越村

小桑原村

館林町

谷越村を抜け、鶴生田川を通り
江戸口から館林城下へ入る。
城下町の様子が詳しく描かれている。
連雀町付近に高札が立っている。

新宿村

船津川村

大新田村

田島村

早川田・渡船場
家康改葬の際には
本多正純が警固。

下早川田村

足次村

参考文献：「館林市史」特別編第3巻　絵図と地図にみる館林
（館林遊絵図は東京国立博物館 提供許可）

９時２８分に館林駅西口を出発。

館林駅西口のロータリーの左を回り、西への道に入る。突き当りの左角に「小泉口御門跡」碑がある。（９：３０）

図面の左下に小泉口御門が描かれている。

小泉口御門

小泉口は城下町総構えの南西角に位置し、小泉方面への城下の出入り口となっていた。

小泉口御門跡石碑裏面

『館林城当時　城下町の出入口としてあった五ケ所口のひとつである
西南方へ通じる街道の要として　木戸守が置かれ　小泉（大泉町）方面へ通じるところから
小泉口と呼ばれ　また古くは新田口とも呼ばれた　館林市教育委員会

ロータリーに戻り左折（北行）し、直進約７０ｍのところに日本建築の「正田記念館」がある。（９：３５）

正田記念館

当館は、嘉永６年（１８５３）に居宅・店舗として２代正田文右衛門が創建した建物。江戸時代から続く米穀商「米文」ののれんを３代正田文右衛門が醤油醸造業へと改めたのは明治６年（１８７３）。以来、昭和６１年（１９８６）まで本社屋として使用され、現在は登録有形文化財に指定されている。当館では、正田家３００年の家系図をはじめ、創業当時の醸造道具や昭和初期のポスターなど江戸時代から明治、大正、昭和にかけての記念品を数多く陳列されている。

開館日　正田醤油(株)の営業日。　休館日　土、日、祝日、夏季休暇日、年末年始、臨時休館あり。

開館時間　ＡＭ１０時～ＰＭ４時。　見学料金　無料。

正田記念館を北に進み、踏切を渡り８０ｍ程進んだ左側に「覚応寺」がある。（９：３９～４３）

覚応寺

開基は佐々木盛綱（頼朝伊豆配流から仕えた名門。近江国宇多源氏佐々木氏の武将。後に出家し西念と称した。）の子孫・林通（りんつう）と伝えれれる。場所は大袋。綱吉時代の城代家老・金田正勝（１６２３～１６９８）は林通の孫・林易（りんえき）に帰依し、城主綱吉に願って３０石の黒印状をたまわり、さらに大袋より現在の地に寺を移した。正勝の父・城代家老正辰（まさとき）は館林で亡くなる。正辰夫妻の位牌は今も納められている。

墓地には「尾曳城絵馬」で有名な浮世絵師・北尾重光の墓や勤王攘夷の志士・大久保鼎（かなえ）の碑がある。寺紋は佐々木氏の四つ目結紋。

境内にある「太子堂」は、佐々木盛綱が親鸞からいただいた太子の木像が納められている。また、館林市指定史跡「浮世絵師・北尾重光」の墓は太子堂の裏に建っている。北尾重光は文化１１年江戸に生まれ、館林に多くの絵馬を残した。

秋元時代の絵図によると、覚応寺は材木町の西端にあり、堀と土塁の内側にある。北に隣接して応声寺がある。絵図を見ると材木町通りの南北に数多くの寺院があったことがわかる。

太子堂

覚応寺を出て、覚応寺前信号交差点を渡り北に９０ｍ程進んだ左手に応声寺の参道と参道の両側に寺号標柱があり、奥に応声寺本堂が見える。境内の右に「鐘楼」がある。（９：４５～５１）

応声寺（おうしょうじ）（館林城の再建をめざす会　城下町館林／お寺紹介）

鎌倉時代末、徳治元年（１３０６）遊行寺二代真教が長福寺という念仏道場を内伴木付近に建てたのがはじまりという。榊原康政が城郭拡張のさい城下・鞘町へ移転させる。さらに綱吉時代・延宝年間（１６７３～８１）木挽町へ移転。

応声寺は館林築城以後、城下町に時を知らせることを担当した寺。天和３年（１６８３）廃城の際、綱吉時代の時鐘を下賜された。鐘は県重要文化財として保存されている。

寺名は初め長福寺。徳川吉宗の長子（家重）の幼名が長福丸。これを避け、時報を担当の寺、応声寺に改めたという。

館林城鐘（群馬県指定重要文化財）（境内案内板より）

この鐘は、寛文十三年（１６７３）、館林城主徳川綱吉が城内をはじめ城下町へ時を知らせるために下野天命（現栃木県佐野市）の鋳物師（いものし）長谷川次郎左衛門藤原勝重に鋳造させた城鐘（じょうしょう）です。

鐘の大きさは、口径７５ｃｍ、胴の高さ１０６．５ｃｍ、龍頭（りゅうず）を含め１３８．５ｃｍ、肉厚７．７ｃｍ、重さは５４０ｋｇを測り、駒の爪や撞木座（しゅもくざ）、上部のツバ、下帯の文様などに江戸時代の巨鐘の特徴を示しています。

乳（ち）の配列は五乳五列。池の間に鐘銘の痕が残っています。この銘文は、綱吉を継いで館林城主となった綱吉の子徳松丸ｇｓ、天和三年（１６８３）に死去し、館林城が一時廃城となった際、城鐘は不要となったことから、当寺、時報係をつとめていた縁故焉で応声寺に下がり渡され、その時の条件としてつぶされ判読不可能となったと言われていますが、その後の研究調査で次のようであったと解読されています。

鐘之為器也、文武兼用、共声之伝、遐邇亮彰、上下聞達、左八音之始而万物由是以動、故内面懸於殿堂以置左右、外面携於軍旅以成進退、然則城楼不可無鐘、可以発晨皆之省、可以戒衛護之務矣、上州館林城者、為関左之重鎮、方今命鳧師、改鋳旧鐘、既脱鑢鞴、新架楼頭、令僕作銘、貴慮之不可辞焉、銘曰

上毛野国　館林城楼　九乳改旧　六時点籌　動而鯨吼　静則雷収　分弁昼夜　抹過春秋　花移長楽　楓添楚遊　晨曦杲杲　暮雲悠悠　近聴先覚　遠響焉廋　有出有入　或去或留　隊士馬進　戊卒夜摳　思武以激　勤直不休　彫弓廬矢　画戟英矛　各守班列　共為好仇　兵備無文　文徳可修　太平固本　方鎮相□　簨虡高掛　鎮勲貽謀

寛文十三年癸丑秋九月吉辰

弘文院学士　林　恕謹記　（参考　館林市誌歴史編）

現在、鐘には幅０．２mm、長さ４０ｃm程の亀裂が入っています。が、この亀裂は、銘文をつぶす時に生じたものと言われ、その後、嘉永元年（１８４８）の火災などを経て広がったものと伝えられています。
「城下町館林」に欠くことができない館林城関係の文化財です。

応声寺を出て左折（北行）して１６０m程進んだ左手に愛宕神社がある。（９：５４～１０：０１）

愛宕神社（館林城の再建をめざす会・城下町活性化PJ・城下町お寺紹介）
城下町のにし、太田口御門近く、木挽町（西本町）に鎮座。本殿奥に小さな山が築かれている。
社伝によれば、文武天皇４年（７００）、修験道の開祖である役小角（えんのおづぬ、おづの）が京都（山城国）愛宕社の祭神「火産霊命（ほむすびのみこと）」を勧請した（霊を迎え入れた）。
鎌倉時代になると、５代執権北条時頼（１２２２～１２６３）は当社への信仰が厚く社殿を造営するとともに別当寺「興蔵寺（こうぞうじ）」を境内に創建し、愛宕神社の管理に当たらせたという。
※興蔵寺：修験道の寺。明治に入り、徳川家の後援を失い廃寺となる。
室町から戦国時代にかけ館林の領主であった赤井・長尾・北条氏らが深く崇敬。
天正１８年、館林に家康の命令で入部した榊原康政も当社を信仰。文禄年間（１５９２～１５９６）館林市中総鎮守と定め、敷地約５千坪を安堵し、さらに慶長７年（１６０２）、社殿を修復、榊原氏の祈願所とした。
寛文９年（１６６９）館林藩主となった徳川綱吉は、社殿をことごとく回収し、建物に葵の御紋の使用を許可した。（現在の社殿の屋根に葵の紋がみえる）
延宝８年、綱吉は５代将軍となったが、当社への信心さらに厚く、元禄１０年（１６９７）には社殿を修築。以後その修理を幕末まで幕府または館林藩が行った。

拝殿の裏手に館林町第１号古墳があり、石段を上った古墳の頂に本殿がある。

本殿に上る石段

本殿

愛宕神社の北隣に傍らのガラス張りの小屋の中に安置された県指定重要文化財「青石地蔵板碑」がある。

「青石地蔵板碑」

時代　鎌倉時代

板碑とは、供養などのために建てられた塔婆（とうば）のことで、板状であることからこう呼ばれて

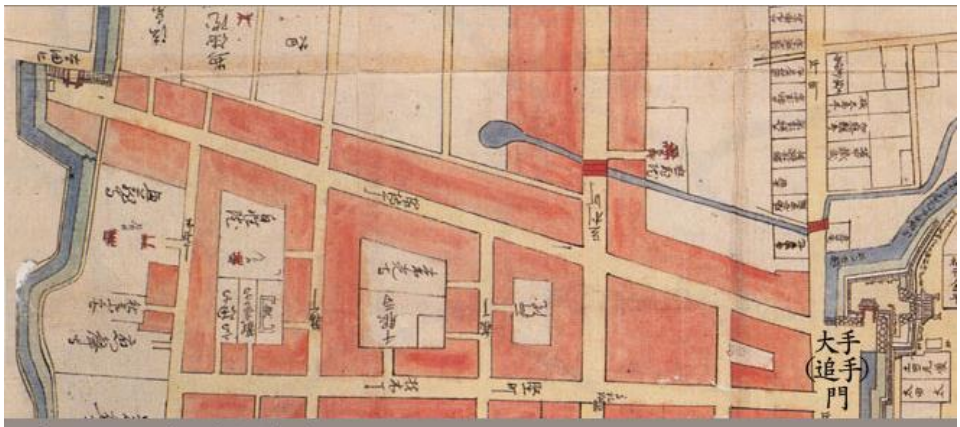
います。関東地方では、埼玉県秩父地方に産出する緑泥片岩を利用することが多く、この石は青く見えることから、「青石（あおいし）」と呼ばれています。

この板碑は頂部が欠けていますが、現状で高さ２０２ｃｍ、重さ８００ｋｇ以上ある大きなもので、上半分には、地蔵尊の像が、下半分に「右忘者為過去慈父□　生死往生極楽成仏釈道　文永十癸酉二月□日十三ヶ歳十二孝子　敬白」の文字が刻まれており、文永十年（１２７３）二月に十二人の子供たちが亡き父の十三回忌に建立したものであることがわかります。

画像板碑としては、群馬県内でも有数のもので、工芸・文化史上において貴重であるとともに、数少ない中世の文字資料でもあります。　群馬県教育委員会　館林市教育委員会

愛宕神社を出て左折（西北行）して１２０ｍ弱の県道の西本町西信号交差点を左折。交差点から１２０ｍ程（法泉寺の先）の右側の路地辺りに「太田口御門」があった。現在は県道の南側に「太田口御門跡」と刻まれた石柱がある。（１０：０６）

太田口：綱吉時代（1660年頃）



太田口：秋元時代（1850年頃）

太田口御門（「館林城の再建をめざす会ギャラリー」より）

太田方面（館林の西）から館林城下への出入りにあたる門。西側には他に南西の角に小泉口御門がある。太田口から大手門までの道は館林城下町を東西に横切る重要な道であった。江戸時代の絵図をみると町名は変わらないのがよくわかる。

太田口南面のほりは現在、埋められていてその跡が細い路地のような道になっている。その場所に昔の工場を改築したカフェがあり、カフェの店内が江戸時代の土塁の場所でお店の前が堀。

【綱吉時代と秋元時代の太田口】

門の造りが、２５万石と６万石の差と言ってしまえば簡単だが、見事に違う。秋元時代の門はまるで低予算の映画のセットのようだ、石垣がなくてただの木の柵だし、門の形状は屋根のつかない冠木門という形式。

綱吉時代はまだ戦国の遺風が残っていて敵に対する防御というか防衛意識が高かったのだろう。

綱吉時代の太田口御門

石柱

車道を少し戻った左手に「法泉寺」がある。（１０：０９～１２）

法泉寺（館林城の再建をめざす会　城下町館林／お寺紹介）

太田口門に隣接して建つ法泉寺。八代将軍足利義政の隠居後、文明１６年（１４８４）義政によって創建されたという。戦国時代になると争乱のため寺は荒廃。慶長年間、館林城主・榊原康政の助力によって再建されたので康政を中興開基とした。寺は繁栄。境内には観音堂・聖天堂・妙見宮・三峯宮など

が立ち並んでいた。文化８年（１８１１）焼失。

境内墓地には榊原康政の兄・清政の子孫の墓がある。清政は家康の長男信康の重臣であったが主君信康が家康の命で切腹。清政は牢人となり弟・康政の館林城内ですごした。寺紋は足利氏の二つ引両紋。

法泉寺に伝わるお話～金亀伝説～（本堂の前庭に石造りの白い大きな亀が置かれている）

『昔、この寺の数ある宝物の中で、特に大切にされていたものに「黄金造りの亀」があった。

この亀は、近郷近在などにめでたいことがあると、必ず前兆があるといわれ非常に珍重され、山号の「瑞亀山（ずいきさん）」も、これにとってつけられたといわれるほどであった。

ある年のこと、この地方がまれにみる大水害に見舞われたとき、どうしたわけか金亀は、人々が洪水に気をとられているすきに、寺を脱け出してしまった。これに気づいた関係者が、水の引けるのを待って近郷近在の村々を、くまなくさがしたがついにその消息を知ることができなかった。

ところが寛文十一年（１６７１）のある日のこと、近在の村の沼辺に、この金亀とそっくりの亀があらわれ、その体から光明を放っていた。これを見た漁師が多くの仲間を呼び集め引き上げ、村の菩提寺に安置した。そのときはまばゆいばかりの金亀の面影はすでになく、ただの石亀になっていた。』

法泉寺から左（東南）へ進み。西本町西交差点の次の信号交差点の先右側に「龍神酒造（株）」の店舗・工場がある。

次の西本町信号交差点を左折し、２４０m程（右側は市立第一小学校）の左に邑楽護国神社の参道があるので入る。（１０：２２）長い参道の先に鳥居があり、その奥に社殿がある。（１０：２４～２６）

参道

拝殿

本殿

邑楽護国神社

当社は、明治２年（１８６９）に館林藩主秋元礼朝が戊辰の役の戦没者３９柱の霊を近藤村大谷原に祠を建て祀った。明治１０年（１８７７）、西南の役戦没者２０柱の霊を合祀。明治１４年（１８８１）、現在地代官町に遷座。大正１３年（１９２４）、邑楽郡内３千余柱を合祀。

護国神社の鳥居を出て直ぐに左折すると「長良神社」の境内に入る。（１０：２８～３７）

長良神社（境内の掲示板より）

◎　御祭神　藤原朝臣長良公（８０２～８５６）

合祀　十七柱

蛭児命・大国主命・豊受姫命・金山比古神・伊弉諾命・伊弉册命・猿田彦神・鹿屋野比売神・倭建命・句句迺馳神・長乳歯神・素盞嗚尊・大山祇神・倉稲魂命・木花咲夜姫命・

菅原道真公・大日霎命

摂社　織姫神社

祭神　天照大神・天乃衣織姫命・豊受姫命・天野八千々比売命・天乃日鷲命・天乃棚機姫命

◎　鎮座由来

祭神藤原長良公は贈太政大臣正一位藤原冬嗣公の長子で、権中納言兼左衛門督に任ぜられ、東国平治のため下向、常に民衆を憐み、病を癒し、貧を救い、仁恵を施した。任満ちて帰京の後、斉衡三年七月三日（８５６）御年五十五才で薨去す。

後元慶元年（８７７）左大臣正一位、重ねて同三年（８７９）太政大臣を贈られた。

死後貞観十一年三月十八日（８６９）大和国春日大社の末社に列せられた。時に上野の住人赤井良遠なる者が長良公の余徳を慕い、本国に勧請せんと奏聞し、勅許を得て佐貫荘長柄郷瀬戸井村上の森に社殿を造営した。以後佐貫の人民をはじめ郡内の人民の信仰深く、分社するものが多く赤井山城守照光館林城主となるや、天福寺境内に社殿を造営して当地に勧請する。爾来領主代々氏子の崇敬厚く、社殿を修復し、境内の整備につとめ、社地の寄進等あり祭事の興隆に努力せられた。

享保五子年（１７２０）正一位長良大明神」の宣旨を賜り、明治六年一月郷社に列し長良神社と改称する。最近祭神長良公の余徳を慕い氏子をはじめ遠近より参拝するものも多く、館林市惣鎮守として社頭殷賑を極めている。（後略）

長良神社の鳥居をくぐり、直進（東方）し１００m程の左側に「五宝寺」の寺号標柱があり、参道の奥に石柱門、その奥に山門そして本堂があり、山門を入った左に「聖天堂」が、その隣に「不動まんだら板碑」がある。（１０：４１～４７）

本堂

聖天堂

五宝寺（館林城の再建をめざす会　城下町館林／お寺紹介

五宝寺は、山号を如意珠山といい、宗派は真義真言宗、本尊は大日如来。

鎌倉後期の永仁五年（１２９７）讃岐国善通寺の僧俊清和尚の開基と伝えられる。江戸時代末には末寺四十数ヶ所をもつ有力寺院であったという。

現本堂は享保年間（１７１６～３６）第１９世弘誉和尚のときの建築といわれる。境内には多くの石仏がある。本堂に向かって左側に永仁五年造立「不動まんだら板碑」（県指定重要文化財）がある。

板碑のそばに建つ聖天堂の本尊歓喜天は旧天福寺（明治４１年五宝寺に合併される）に安置されていた。天福寺は天福元年（１２３３）創建という。華麗な彫刻で飾られた聖天堂であったが、大正元年焼失した。

不動まんだら板碑（五宝寺境内説明板より）

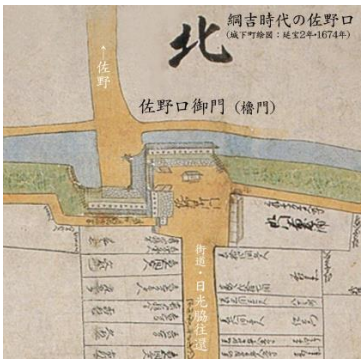
この碑はもと当寺歴代住職の墓域内にあった。

石材は緑泥片岩、高さ１．１２m。頭部と基根部が欠けている。碑面の郭線は三段に仕切られ、最上の郭線内には蓮台上に三弁宝珠サンベンホウジュ（大部分欠損）を配した弥陀種子が大きく彫刻されている。中段の郭線は二重になっていて、中の線内には直径８ｃｍの各円内に梵字で不動・降三世・軍荼利・大威徳・金剛夜叉の五大尊種子がほられている。

また外の郭線内には直径４ｃｍの円線内に一側に三つずつを配し、日天・帝釈天・梵天などの十二天種子がきざまれ、さらに下の郭線内に高さ２３ｃｍの変形五輪が太い線で二基陰刻され、その中央に「永仁五年（一二九七）丁酉」と年号が風雅な文字できざまれ、当地方における優秀なものの一つである。背景に当寺開基造立の後刻があるが、上屋築造のさいコンクリートにより防護したので見えない。

昭和四十八年一月　　館林市

五宝寺から左（東方）へ１５０m弱で中央通りに出るので交差点を渡り左折。２００m弱の坂を下った小川（濠跡？）の手前の空き地の角に「佐野口門跡」石碑がある。（１０：５２）



佐野口御門（「館林城の再建をめざす会ギャラリー」より）

城下を南北に縦断する主要街道「日光脇往還」の佐野方面への出入り口。綱吉時代の絵図によれば江戸口と同じ壮麗な櫓門であり、桝形の形態で堀と石垣を備えた堅固な門。秋山時代の佐野口門は棟門である。

中央通りを左に渡り、直ぐ１０m先で左折。２０m程の水路の右側にかつて佐野口御門のから出た旧街道が走っていた。その西側先に館林城惣堀土塁跡がある。（１０：５２～５５）

中央通り左側を下り、信号交差点を渡った４０m弱に左に入る二又の道があり、その分かれ角に２基の「**道標**」がある。（１１：０２）

右の道標「右　さの　とちぎ　道」「左　かんま　ひこ満　道」（佐野・栃木・閑馬・飛駒）
左の道標「らいでん道」天保六年（１８３５）。「らいでん」は群馬県邑楽郡板倉町の「板倉雷電神社で、関東一円、特に利根川流域に点在する雷電神社に総本宮。創建は推古６年（５９８年）聖徳太子によると伝わる。（ガイドで、矢場川水門近くの雷電神社と記しましたが、間違いでした）

街道は、ここから右にカーブし北東へ進む。*（ここから道の左側には当分の間、歩道はない）*
６５０ｍ弱の「渡瀬歩道橋」の左奥に東武佐野線渡瀬駅がある。歩道橋から２６０ｍ程で佐野線の踏切を渡る。（１１：１６）この辺りは見晴らしが良く赤城山や男体山が見えるのだが、今日は霞んで山は見えない。

渡瀬歩道橋

東武佐野線踏切

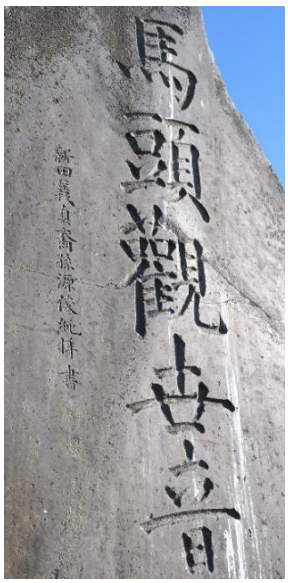
下見時の赤城山

下見時の男体山

下見時の風景

直進すると塀で囲まれた旧家があり、その先に下早川田町集会所がある公園がある。ベンチ、トイレがあるのでここで昼食とする。（１１：３３～５４）

昼食後、渡良瀬川の堤防を上ると河原に石仏群が見えるので下りて見に行く。（１１：５７）ものすごい数の石仏は全て馬頭観音であった。（１１：５７）



新田義貞裔孫源俊純俳書

堤防上に利根川までの距離（２３．０ｋｍ）、海までの距離（１５５．０ｋｍ）表示柱がある。

堤防上を下流へ行くと県道７号線に出るので左折し渡良瀬大橋を渡る。

渡良瀬川

渡良瀬大橋

渡良瀬大橋は、群馬県館林市下早川田町にある渡良瀬川および矢場川に架かる橋。左岸上り線の一部が栃木県佐野市船津川町域に掛かる。

昭和９年（１９３４）に２車線で開通。昭和５６年（１９８１）に下流側に隣接して新橋（２車線、現在の上り線）を建設した。橋長５５１．５m、幅員９．７５m（車道７．２５m、歩道２．５m）。旧橋は歩行者専用橋として使用。平成８年（１９９６）、旧橋を解体し架け替えを行う。（２車線、現在の下り線）橋長５５１．８m、幅員１１m（車道７．５m、歩道３．５m）。平成１２年（２０００）に上下線片側２車線（完成４車線）での共用開始された。

８分程かかって渡良瀬大橋を渡る。

渡良瀬川左岸の堤防上を上流へ進むと「田中正造翁之墓入口」の看板があり、下って堤防に沿って行くと雲竜寺の山門がある。（１２：１８～２２）山門を入って参道の左側に「薬師堂」、「田中正造翁の墓」と「救現堂」があり、参道の奥に本堂がある。

薬師堂

田中正造翁の墓

田中正造翁の墓

翁終焉之地碑

救現堂

本堂

雲竜寺

雲竜寺のある場所は、渡良瀬川左岸でもこの一角だけが群馬県館林市下早川田町である。山号は瑞光山。宗派は曹洞宗。創建は天文２２年（１５５３）。開基は早川田氏家臣。文化財：田中正造の墓、救現堂（足尾鉱毒被害者救済施療所）

田中正造の墓、救現堂（雲竜寺境内説明板と Wikipedia より）

明治２９年（１８９６）１０月、大水害を契機に田中正造は渡良瀬川左岸に位置している当寺に栃木群馬両県鉱毒事務所を設けた。さらに足尾銅山鉱業停止請願事務所として栃木、群馬、埼玉、茨城の４県鉱毒被害民の闘争本部となった。また、三つ作られた足尾鉱毒被害者救済施療所「救現堂」の一つが当寺にも設けられた。

明治３３年（１９００）２月、鉱毒被害民はここに集結し請願のため上京する途中、利根川を渡ろうとして川俣村（現明和町）で弾圧された（川俣事件）。

大正２年（１９１３）９月４日、田中正造は栃木県足利郡吾妻村（現佐野市下羽田町）の庭田清四郎宅で７３歳で没し、当雲竜寺で仮葬儀（密葬）が行われ、本葬儀は惣宗寺（佐野厄除け大師）で行われ、その後、遺骨は被害民によって当雲竜寺、惣宗寺と田中家の菩提寺の浄蓮寺に分骨され、墓が設けられた。

当寺の墓は正造の没後２０年にあたる昭和８年（１９３３）に、渡良瀬川沿岸に住む人々の浄財によって建てられた。墓石の高さは約３ｍあり、首部の細い特徴のある宝塔である。平成６年（１９９４）の解体修理の際、基壇の最下段中央部に骨壺が確認された。

右に建つ「救現堂」には正造が祀られている。

堤防上に戻り、斜面を斜め左に降りて県道７号線のカードをくぐり、道は上り坂となり、才川を渡る。渡ると栃木県佐野市下羽田町である。才川を渡ると直ぐに丁字路となり左折。左側の屋敷の入口に「田中正造終焉の家」の説明板がある。（１２：２８）

佐野市指定史跡　田中正造終焉の家（庭田清四郎宅前の看板より）

田中正造は、大正２年七月から佐野・足利を活動資金の調達のために奔走していましたが、その途中、大正二年八月二日に吾妻村下羽田の庭田清四郎宅にて病に倒れました。

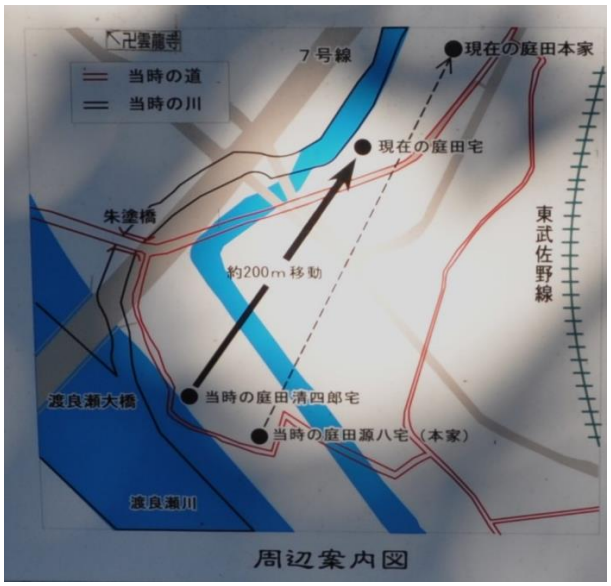
庭田清四郎は、かつて正造が鉱毒地の調査で当地を訪れた際、自宅に泊め、周囲の被害状況の案内を行っていました。

その後、正造はこの家で庭田家の人々の献身的な介抱を受けましたが、三十四日間この家で病床に伏した末、九月四日に亡くなりました。

現在、家屋は当時の場所から約２００ｍ北に移動していますが、正造が亡くなった部屋は当時の姿を残しています。

平成二十五年九月四日指定　佐野市教育委員会

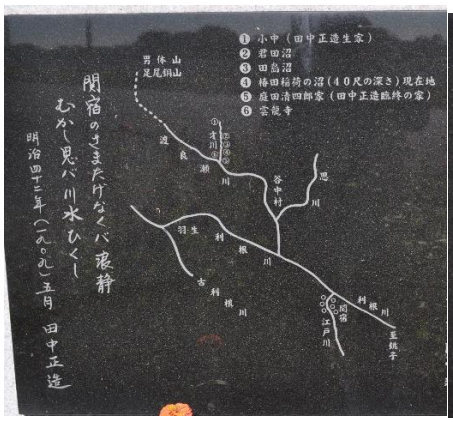
佐野市田中正造翁没後百年顕彰事業実行委員会

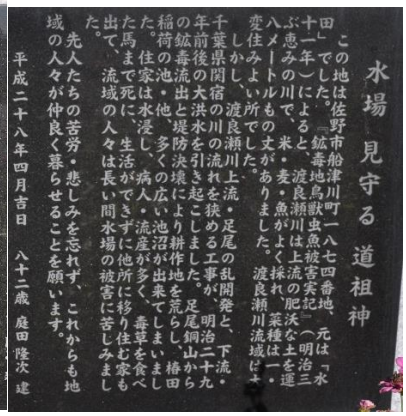


庭田家

先に進むと右からの道に合流し、右に東武佐野線線路が迫って来、線路沿いに右から来た道と合流する。その直ぐ先左側の駐車場に「椿田稲荷神社鳥居」がある。この鳥居はこれから行く「椿田稲荷神社」の参道入口で一の鳥居と思われる。県道７号線が船津川より来る参道を消滅させたとしか考えられない。

ここから１５０m程で県道７号線に合流する。その手前左に可愛い「双体道祖神」と「水場　見守る道祖神碑」、そして、合流角に北を向いて「田中正造翁終焉の地碑」がある。（１２：３５）





水場　見守る道祖神

この地は佐野市船津川町一八七四番地、元は「水田」でした。「鉱毒地鳥獣虫魚被害実記」（明治三十一年）によると、渡良瀬川は上流の肥沃な土を運ぶ恵みの川で、米・麦・魚がよく採れ、菜種は一・八メートルもの丈がありました。渡良瀬川流域は大変住みよい所でした。

しかし、渡良瀬川上流・足尾の乱開発と、下流・千葉県関宿の川の流れを狭める工事が、明治二十九年前後の大洪水を引き起こしました。足尾銅山からの鉱毒流出と堤防決壊により耕作地を荒し、椿田稲荷の池・他、多くの広い池沼が出来てしまいました。住家は水浸し、病人・流産が多く、毒草を食べた馬まで死に、生活ができずに他所に移り住む家も出て、流域の人々は長い間水場の被害に苦しみました。先人たちの苦労・悲しみを忘れず、これからも地域の人々が仲良く暮らせることを願います。

平成二十八年四月吉日　八十二歳　庭田隆次　建

双体道祖神　水場　見守る道祖神

この地は佐野市船津川町１８７４番地、元は「水田」でした。「鉱毒地鳥獣虫魚被害実記」（明治３１年）によると、渡良瀬川は上流の肥沃な土を運ぶ恵みの川で、米・麦・魚がよく採れ、菜種は１．８メートルもの丈がありました。渡良瀬川流域は大変住みよい所でした。

しかし、渡良瀬川上流・足尾の乱開発と、下流・千葉県関宿の川の流れを狭める工事が、明治二十九年前後の大洪水を引き起こしました。足尾銅山からの鉱毒流出と堤防決壊により耕作地を荒し、椿田稲荷の池・他、多くの広い池沼が出来てしまいました。住家は水浸し、病人・流産が多く、毒草を食べた馬まで死に、生活ができずに他所に移り住む家も出て、流域の人々は長い間水場の被害に苦しみました。

先人たちの苦労・悲しみを忘れず、これからも地域の人々が仲良く暮らせることを願います。

平成二十八年四月吉日　　八十二歳　庭田隆次　建

（注：庭田隆次氏は庭田清四郎氏から数えて四代目の当主。）

また、「三毳山夜曲歌碑」がある。

田中正造翁終焉の地

真の文明は山を荒さず川を荒さず

村を破らず人を殺さざるべし

田中正造翁は運動の途中倒れ、一九一三（大正二）年九月四日栃木県佐野市下羽田（旧足利郡吾妻村）の庭田清四郎家で満七一歳の生涯を閉じた。翁は、近代日本の「公害の原点・足尾銅山鉱毒事件」で苦しんだ被害民の救歳・人権回復に半生を捧げた。

明治政府は、被害地人民の生命と生活をかえりみず最後は谷中村を廃村にし、残留した被害民の家屋まで強制破壊した。

翁は、「亡国日本」を救う運動の中でつちかった「人権、自治、環境・自然と共生、憲法政治の確立、平和、軍備全廃」思想を百年前に主張している。翁こそ、環境人権破壊に抗する人びとの味方として永遠に記憶に留められる人物である。

庭田家ではその後、現当主隆次氏まで四代にわたって、田中翁が病臥し死去した部屋をそのまま保持し訪れる人々に翁の思想と行動を伝え続けている。

庭田家の近くの雲龍寺（群馬県館林市下早川田）は鉱毒被害民運動の拠点だった。当寺の住職黒崎禅

翁師も被害民と共に闘い川俣事件で逮捕された。

雲龍寺には翁の分骨地墓と「救現堂」「足尾鉱毒事件被害之碑」がある。

庭田邸と雲龍寺は「田中正造翁終焉の地」として、「百年の悔いを子孫に伝うるなかれ」という翁の戒めを私たちに常に発信し続けている歴史的精神遺産である。

二〇一七年八月吉日

記念碑建立実行委員会

県道７号線を渡り左折し１００ｍ程進んだ右側に「椿田稲荷神社」の境内に降りる階段がある。

降りたところからの参道に多くの鳥居が社殿まで続く。先ほど見た駐車場の鳥居から昔はここへ参道が続いて在ったものと思われる。（１２：３７～４３）

椿田稲荷神社

当社の創建等については不明。境内には数多くの祠、もの凄い数の狐の置物、霊験あらたかなのか。

交差点に戻り、７号線を直進。２５０m程の信号交差点を左折する。１１０m程の右の道に入り、車道に沿って進み、８０m程で道なりに直角に右に曲がって７０m程の左側に豪邸がある。
（１２：５２～５５）

ここが「**椿田城址**」で、水堀を渡った邸前庭に「**椿田城跡**」標柱、「**椿田城址**」石碑や「**椿田城跡・銅造鰐口・下野絵図**」**案内板**があり、正面に立派な**屋敷門**があり、左に「**椿田十一面観音福地堂**」がある。

椿田城跡（佐野市ＨＰより）

椿田城跡は、市指定史跡の平城です。西側には才川が流れ、現在は用水路となる城跡を長方形状にめ

ぐる水堀が、城の内堀だったと考えられます。内堀をめぐらす内郭と、その周囲に城地を構えていたと考えられます。内部の規模は、東西約６５メートル、南北約１００メートルになり、堀の幅は、場所によって多少異なりますが、概ね２メートル程、深さは約１メートルになります。

当地は、佐野小太郎盛綱のときに、客将として招かれた福地丹波守仲久が初めて居住し、その後、仲久から四代後になる福地出羽守寧久が、永禄三年（１５６０）に、当城を築きました。当城は唐沢山城の南端の出城として構築され、川越・忍・館林の三城のおさえとしました。佐野氏の改易とともに廃城となり、それ以後は福地氏が名主として代々当地に居住しました。

福地家には、天正１８年（１５９０）豊臣秀吉が小田原城を攻撃する際、その臣加藤清正から要請を受けて、天徳寺宝衍（ほうえん）が、福地氏を含む佐野家の重臣５名に命じて提出させた絵図も残っており、市の指定有形文化財として佐野市立郷土博物館に保管されています。

椿田城跡（敷地内案内板より）

永禄三年（１５６０）唐沢山城の出城として構築され、川越・忍・館林方面に対する抑えとして、代々福地氏が城主となっていた。慶長十九年（１６１４）佐野氏改易とともに廃城となり、以後福地氏が名主・郷士として住んできた。やや方形の宅地の外側に幅２．６～２．８メートル、深さ約１メートルの水堀が残っている。

銅造鰐口（敷地内案内板より）

椿田の福地家屋敷内の観音堂にあり、天明六年（１７８７）天明（てんみょう・天命）の鋳工丸山善太郎の作である。この鰐口は一旗の守護のために各地の代表者が寄進したもので、特に撞座の部分がすばらしい。

耳とも横２９．５センチメートル。縦２９．５センチメートル。厚さ１０センチメートル。

下野絵図（敷地内案内板より）

天正十八年（１５９０）秀吉の臣加藤清正からの要請を受けて、天徳寺了伯（注　天徳寺宝衍〈ほうえん〉）が佐野家の重臣山上道牛、福地出羽、高山外記、田口豊後、浅野弥十郎の五名に命じて提出させた下野絵図の手控である。筆跡や用紙から安土桃山期のものと推定される貴重な資料である。

縦　１１８ｃｍ。　横　１７２ｃｍ。

平成二十五年二月十二日　　佐野市教育委員会

（注）天徳寺宝衍（ほうえん）もしくは了伯

佐野氏第１３代当主佐野泰綱の三男（第１４代豊綱の次男とも）で佐野房綱。房綱は天正１８年～１９年佐野氏名代を豊臣秀吉から任じられる。

椿田十一面観音福地堂

赤松福地家守護神

「椿田十一面観音福地堂」の由来

赤松福地家代々の守護神として伝わる十一面観音は一寸六分（約５．３ｃｍ）の黄金造りのもので、遠祖具平親王（人皇第六十二代村上天皇第七皇子）より季房（赤松氏祖）則景、能久（福知山城主、福地家祖）と受けつがれた。何時の頃よりか、ご本尊を兜の前立に納め、数多くの合戦に出陣した。第七代丹波守直久は、西国の乱（広永四年五月十八日）に際し、備中戸岩の城攻めの時、敵兵の放った矢を兜に受けたけれど、矢の根が折れて裏まで貫通せず、無事であった。

また、第二十代出羽守寧久（後昌寧と改む）は、天正十一年正月朔の未明、唐沢山城城主佐野宗綱公に従って彦間須花坂の合戦に臨んだ時、敵兵の放った鉄砲の弾丸が兜に当たったが、弾丸は微塵に砕け散っただけだ、少しも傷を受けなかったという。

これも十一面観音の神霊のご加護によるものと語り伝えられている。因みに寧久の法名は霊性院殿一弾全無大居士になっている。この本尊を厨子に納め、赤松福地一族の守護神として堂宇を応仁年間（１４６７～８）に、建立したのが、椿田十一面観音福地殿である。

北側から見た椿田城址

屋敷を北へめぐって進み、突き当り丁字路を右へ行くと県道７号線に出る。交差点を右に渡る。東武佐野線の踏切を渡り、道なりに国道５０号線のガードを潜って進むと、３００m程で東武佐野線田島駅に入り口があり、１３時１４分に到着。１３時３９分発館林行きに乗る。